

講演録

発達の多様性を記述する新しい心理学方法論としての 複線径路等至性モデル

サトウタツヤ¹⁾

Trajectory and Equifinality Model (TEM): How can psychology's methodology become tuned in to the reality of the human development variations?

SATO Tatsuya

1 はじめに

心理学において、その対象抽出の方法はサンプリングと総称されており、様々な工夫が蓄積されてきている。データ処理に推測統計学の視点を取り入れると、発達心理学・社会心理学・性格心理学などの領域ではランダムサンプリングと呼ばれる方法の優位性が主張されるに至っている。実際にこれらの分野の論文を渉猟するならば、ランダムサンプリングが行われている研究はほとんど無いと言って良い。だが、ランダムサンプリングは統計的検定を行う前提でもあり、建前としてはランダムサンプリングが保たれているとされている。一方、こうした世界観に真っ向から対立するのが、事例研究における事例抽出の方法であり、特に少数の事例を扱う際に、その代表性の危うさ（偏り）が否定的に言及されることは枚挙にいとまがない。心理学において伝統的な分野である視知覚研究における対象者は多くの場合任意抽出であるが、そう

した抽出方法は、結果変数に対する影響力のなさという観点から認容される。

では、心理学の他分野における研究の事例研究ではなぜ代表性が問題になるのか。あるいは、こうした問題を生産的に回避して新しい認識を作っていくにはどうすればいいのか。本稿ではこうしたことについて考えていきたい。

2 事例研究とモデル生成

事例研究の事例抽出方法について「偏り」という観点から批判された場合にそれに反論することはかなり難しい。したがってサンプリングの問題を指摘されると事例報告は多くの場合において不利となる。サトウ（印刷中）で述べたように、「事例が少数であり偏っているおそれがあるのではないか」というような指摘には、「このサンプリングは母数推定のためではなく、事例の理解のために行っており、この結果が何かを代表しているかどうかを直接問題にはしていません。もし有用な知見であれば、他の人によって転用されるでしょう」と答えればよいのかもしれない。だが、こうした反論が受け入れ

1) 立命館大学文学部教授

られるとも限らない。

むしろ、対象抽出に関する新しい切り口を考えていく方が生産的だろう。「事例研究はサンプリングがなっていない」と考えるのではなく、「事例研究はモデル（作成）のため」というように考えていくのは一つの解決策ではないだろうか（やまだ, 1997）。

モデルと言った時には様々なモデルがありえる。例えば、理想型としてのモデル、何かを抜き取ってきた抽象成分としてのモデルもあるし、平均像という意味でもモデルということが可能である。理想型というのは、いわゆるファッションモデルにおけるスーパーモデルみたいなもの。体型や着こなしについて「こういうふうになりたい」という理想型。抽象成分としてのモデルとは、化学における分子モデルのようなもの。それを数式にするというのもモデルとなる。平均像としてのモデルというのは、家計におけるモデル収入のようなもの。37歳会社員、妻一人子二人。こんな家族は実際にはないかもしれないが、モデルの役割を果たす。

事例研究を論文化する時に、その事例のことだけを書いたのでは評価されにくい。事例記述から何らかのモデルを作っていく必要があるのではだろうか。

事例研究はなぜ有効なのか、ということについて臨床心理学の事例研究報告の立場から河合（1976/1986）が以下のようなことを述べている。すなわち（京都大学教育学部の）研究室が発行している事例研究報告集に対して「一つの症状について何例かをまとめ、それについて普遍的な法則を見出すような論文よりも、一つの事例の赤裸々な報告の方が、はるかに実際に“役立つ”」という感想が寄せられたというのである。

実際の事例研究の報告がなぜ他の人にとって実際に役立つと感じられるのだろうか。それは様々な意味において事例がモデルとして機能したからだと思われる。具体的に実在した事例は

あるカウンセラーとあるクライアントによる一期一会（あるいは偶有性）であり、他の人物同士の出会いで置き換えることはできない。ところが、少し抽象度をあげるなら、「カウンセラーなる人」と「クライアントなる人」の出会いはどこかで発生し生成し続けていく。一期一会的な関係において何が起り何を感じそしてこの関係がどうなっていったのか、ということの記述は、同じような立場にいる実践者のモデルとして機能するのである。これは転用可能性という言葉で表現できるだろう。普遍性があるからではなく転用可能だからこそ、事例報告には他の人に有用な意味が生じるのである。また、報告という形で活字にするからこそ、時空間を超えて他者が読むことが可能になるということも強調しておく必要があるだろう。いくら苦しくても活字化・論文化をしなければいけない所以はここにある。

事例報告・事例研究は事例を記述するから他の人にも有用なのではなく、モデルが提示されるから論文を読む人にも役立つような広がりが出てくるのである。抽象的にするとか一般化するとかいうのではなく、モデルという概念を意識することが必要なのである（やまだ, 1997及びやまだ, 2002）を参照。事例報告において普遍性を求めないとしても、臨床心理学の実践を記述するなど現場型研究をする時にはモデル構成が必須なのである。

医療社会学者のアーサー・フランクは、「病いになった人は、情報や海図を失う難波船のようなものである」と述べた（Frank, 1995）。近代医療は病いに焦点をあてそれを治そうとする。あたかも難破船を修理し海図を失った地点に連れ戻すようなことなのかもしれない。そして、重篤な病いであればあるほど、患者の生活は医療に支配され、患者の語りはすべて医療に役立つものとして回収される。完治した患者は、海図を失った場所に戻り、再びそこから歩き始

める。

急性で回復可能な病いはこれでいいかもしれないが、フランクが目にするような不治で慢性の病いでは事情が若干異なる。文字通り「情報や海図を失う難波船」のようになる。このような場合、語りが医療の側に回収されても役に立たない。医療は決して難破船を元通りに修理してくれないのである。修理もされず海図も失った中でどうするのか。フランクが重視するのは語りである。語り直しにより船を改修し、そして海図を描き直すのであるから。ここで哲学者・クワインが好んだノイラートの舟の逸話を思い出してもよい。クワインは、自己同一性を持ちながら少しずつ変化するような知のシステムを「ノイラートの舟」と呼んだ。舟は新しいものに変えていかねばならないがドックに入るとは許されない。進みながら直せるところを直し、直しながら進んでいく(富田, 1994参照)。クワインの関心は「知」の「システム」にあったが、私たちはこれを「システム」としての「患者」にあてはめることが可能だと考えてみたい。システムは外界との相互交渉を行いながら常に自分(システムとしての自身)を更新していくものである。システムとしての患者という考えを元にしたときの研究アイデアについては後述するが、病いを得た状況、病いと共にある状況で、患者が語るということは、外界とのやりとりを行いながら自身を更新していく重要な行為である。

病いを得、そのことに気づいた経緯や得てからの経緯を含む自分自身について患者自身が語る。こうした語りの一部はもちろん医療に重要な情報として医師に使われる必要がある。それが治療に役にたつこともある。これは、病いについて聞くのは医療関係者が多いことの反映でもある。

だが、脱近代の医療において重要なのは「医療に回収される語りの内容」なのではない。語

ることや語り直すこと自体なのである。そして、語りに本質的な地位を与えるためには、医療モデルに必要な情報提供だという理解だけでは不十分なのである。事例研究だとか、記述的研究だとか、モデル化によって研究を積み重ねていかなければ、患者の語りは常に医療システムに回収され続けるだろう。かといって、患者の語り患者本人の自己を更新していくには、ただ聴いていれば良いというわけでもない。聴いた人が学術論文の形で公刊していくこと、つまり学問という形が必要なのである。医療モデルに対抗するモデルが何であるのか明確に述べることは現時点では難しいが、医療に回収されないためにはモデル化が必要である。ではモデル化をおこなうにはどのような方法があるのか。以下では、筆者たちが提案する新しいモデル化の方法論を紹介する。

3 新しいモデルとしての複線径路等至性モデル

以下では筆者がクラーク大学のヴァルシナー教授(以下敬称略)らと一緒に生成している理論モデルについて紹介していきたい。複線径路等至性モデル(=Trajectory and Equifinality Model: 以下, TEM)である(Valsiner and Sato, 2006)。TEMとはデータの分析及び記述に関する質的心理学・文化心理学の新しい方法論である(サトウ, 安田, 木戸, 高田, ヴァルシナー, 2006参照)。

心理学の理論は一般に具体的な場や時間を捨象することによって一般的概念を生成していく。そしてあたかも抽象的な人間なるものが存在し、そこに普遍的な心理学的概念が存在するようなお膳立てをしてしまう。たとえば発達段階という概念はいかにも時間が組み込まれているようではあるが、個々人の時間は完全に捨象されており、普遍性志向を強く誘導する。発達における段階モデル(Stage model)について

批判的に検討する論者も現れている (Moghaddam, 2005)。具体的には、連続性より段階が強調される、階層が固定的に捉えられる、段階が普遍的に捉えられる、段階が決定的に捉えられる、統合的な発達が仮定される、健康な発達が次元のものと捉えられる、健康な発達が普遍的に捉えられる、個人が主体的に行動する側面が強調される、という8つの側面から発達の段階説が批判されているのである。また、発達段階には平均的発達像が描かれているか、せいぜい正常と逸脱という二分類的な記述に回収されてしまうため、結果として個人が具体的場で具体的時間の中でどのように変化していくのか (いかないのか) について記述することができないことも指摘しておく。蛇足ながら、安定した状態が変化のない状態として消極的に記述されることも問題である。発達は、変化も安定も時間の中で絶え間なく変動している結果として捉えられなければならない。

複線径路等至性モデルというのは、ある主題に関して焦点をあてて研究をする時に、人間の行動、特に何らかの選択とその後の状態の安定や変化を、複線性の文脈の上で描くための枠組みである。複線性は単線性に対する言葉である。複線径路等至性モデルは時間と共にある人間について描くことを目的とするため、発達心理学の方法論でもあるのだが、むしろ人間と外界との関係を強調するという意味で文化心理学の方法論であると理解されたいと願っている。

4 文化心理学とは何か。比較文化心理学との「比較」を通して

本論において、文化心理学とは比較文化心理学とは少し異なる。

比較文化心理学では、たとえばアメリカと日本があるとして、それらは異なる文化であり、人は異なる文化に属するためにその性質も異なっている、という理屈になっていく。文化が実

体化されており、そこに人間が属していると考える。したがって文化の差は独立変数の役割を与えられる。だが文化心理学では文化が人間に属すると考えるのである。属するというのが妙に聞こえるなら、文化は常に人間に纏^{まと}うことで文化たりうるのだ、ということである。

では、文化とは何か。人間は誕生の瞬間から生身では生きてはいられない。様々な支援が設定されていく。それら全てが文化だと考えるのがヴァルシナー (Valsiner, 2001) の基本的立場である。文化の中に人間が生まれ落ちていくのではなく、人間に文化がまわりついていく。その文化には様々な違いがある。一例をあげればスオドリグ (ぐるぐる巻き) という方法がある。子どもが誕生するとすぐにグルグル巻きにしてハイハイなどをさせない育児法である (正高, 1999)。日本でこうした育児法を目にすることはないし、それどころか、もし目にしたなら残酷だとさえ感じるだろう。しかし、実際には一年後にスオドリグから解放すると子どもは歩くことが可能になる。このような育児法は、発達心理学者・ゲゼルの成熟説を思い起こさせるかもしれないが、ここで言いたいことはそういうことではなく、様々な様式で文化が人々の生活に宿り、誕生直後から人の成長をそれぞれの方法で支えているということである。

人間は種としては一種類だが、文化は多様である。ミクロな目をもてば隣の家庭と自分の家庭の間に文化の違いを見いだすことができる。マクロな目を持てば国、民族、そういった集団に文化差を見いだすのは非常にたやすい。だが、マクロな目を持った時でさえ共通点の他に差異を見いだすことも可能である。種は一つであるが生活する場は非常に多様。気候の違いなども生活に大きな影響を与える要因である。だからこそ、生身の人間を護るための文化にも多様性が生じるのであろう。つまり、人間と環境の絡み合いの中にこそ文化の多様性が生まれる契機

があり、そうした多様性が時間を超えて継承されていく。

では人の多様性は制限がないのだろうか。人間の発達はある意味では多様性をもっているが、生物体としてもっている制約や広義の文化的制約を多々受けるために、ある一定程度の範囲内に収まりがちとなる。TEMは制約についても記述する。

一方で、文化が個人に与える影響が単一ではないと確認しておくことも重要である。比較文化心理学的な比較を行うと、2つの文化の違いだけが強調されてしまう。だが、環境と人間の関係に関してredundant control（冗長な統制）という概念もある（Valsiner, 2001）。ある人物に対して環境側の単一の要因が唯一影響していることは稀で、むしろ、様々な要因が同じ時同じ人物に異なる影響を与えている場合の方が多い。そうした様々な要因の影響力行使の中から何かを選び取り（選び取られ）個人はある一つのことを選択するという側面がある。このことは冗長性であるとともに、個人の選択肢をひろげ他の進路の保障としても働くのである。これは小嶋が提唱したEthnopsychological pool of ideasという考えにも近い（Kojima, 1998）。

文化の問題は違いだけを強調するのではなく、また、過去のことだけを考えるのではなく、共通性や未来の可能性を描く必要がある。その際に、個人と環境の関係を複数の道筋の中に記述していこうというのがTEMの考えの基調である。

5 複線径路等至性モデルの典型と主要概念

現在、複線径路等至性モデルは図のようなものを典型として様々な出来事や多様な径路を描くようにしており、主要な概念がいくつかある。詳しくはサトウ他(2006)を参照してほしいが、いくつかの概念について解説しておく。

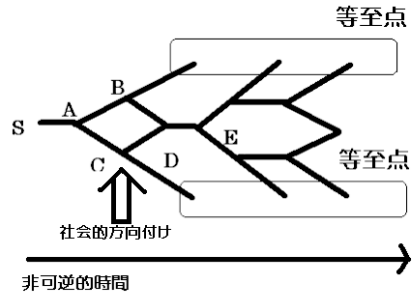


図1 複線径路等至性モデルのひな形

まず「複線径路」は、発達の多様性や多線性を示すためにヴァルシナー（Valsiner, 2000）が導入したものである。なお、この複線径路は、等至点が想定されることで定まることに注意を要する。到達する点が定まることで多様性が見えてくるのである。目的や上位概念と呼んでも良いが、そうした統括するものがなければ多様性は見えず単なる無秩序となる。たとえば将棋、野球、英会話、ジャズなどという活動は、ある高校に存在する部活動だと言われると、多様性として見えてくる。部活動を上位に置くから多様性と言えるわけで、ただ、将棋とか野球とだけ言っていると多様性というよりは無秩序と感じられる可能性さえある。多様性を記述しようと思ったら必ず到達する点というものを置く必要がある。

「等至点」とは研究者が等しく至るとして焦点を当てた点。例えば「お小遣いをもらいはじめる」とか「自分から化粧をするようになる」など。ただし、「子どもを産む」のようなものを等至点にした際には、子どもを産むということが価値づけられてしまうおそれがある。そこで、価値づけを中和する意味でも、ある行為に対する補集合的行為を考えてそれを「両極化した等至点」として設定することを推奨している。これは安田（2005）によって生成された。

「必須通過点」とは必ず通る点である。これはもともと地理的な概念で、ある地点からある

地点に移動する際に必ず通らなければいけない地点という意味である。船で日本海側の島根から台湾に移動しようとするれば対馬海峡を通らなければいけない。これが必須通過点である。もちろん、実際には北に針路をとり津軽海峡経由で太平洋を南下して台湾に航行することも可能だが、かなり大回りになる。この状況では対馬海峡が必須通過点であると言える(このように、必須というのは完全な意味での必須を意味するわけではない)。具体的な心理学的研究から例をとれば、女性は積極的に自分で化粧をするようになる前に、ほぼ必ず受身的な化粧をさせられているということがある(木戸, 2006)。明文化されたルールはないにもかかわらず、女の子の多くは化粧をされてしまう。従って、受身的化粧は文化心理学的な意味での必須通過点であると言えるのである。この通過点を通った後で、「やっぱり自分は化粧が好き」と思って親の目を盗んで化粧し始める子もいれば、興味がないからしないという子もいる。

「非可逆的時間」。「時間は持続しているのであって計測することができない」、というのがベルクソンの考え方である(Bergson, 1889/2001 金森, 2003などを参照)。そして時間は逆行しない。TEMでは人間が時間とともにあることを非可逆的時間という概念を用いて表す。

「オルタナティブ・オプション(代替選択肢)」という考え方も重要である。オプションがどういうふうにあるのか、あり得たのか。これは「分岐点」でもある。選択肢がなければ分岐点も存在しないので、選択肢は多様に存在することが望ましいと言える。選択肢が見えないのは問題だからである。

「社会的方向づけ」。これは選択肢における個人の選択に有形無形に影響を及ぼす諸力を象徴的に表したものである。図1のCは分岐点であり、その後の径路は2つに分かれている。しかし、実質的に選択肢として機能せずDに行くし

かないのであれば、そこには力(パワー)が働いていると考えることができる。こうしたことを表すのが社会的方向づけという概念であり、これは木戸(2006)によって方法論の中に取り入れられた。

まとめて説明すると、非可逆的時間の中である人が経験したことを聞き取り、様々な出来事や反応を構成しながら他の可能性も考えていくということを複線径路等至点モデルと呼ぶ、ということになる。径路の多様性を重視し、当事者にとっての選択肢やコースも提示することが大きな特徴である。また、このモデルにおける主体は人間及びその生活にほかならないが、個体主義的な人間観をもつのではなく、オープンシステム(開放システム)としての人間を前提としている。なお開放システムとは、それを取りまく外界・環境との交換関係抜きには存立しえないシステムのことであり、あらゆる生命体は開放システムである(Valsiner, 2001)。

6 複線径路等至性モデルによる諸事例記述のあり方

心理学や社会学において個人を扱いつ時間の流れを扱うモデルは多くない。また、個人が選び得なかった人生について扱うことも少ない。心理学は実証的の学問であるからそうした制約があるのも仕方ないかもしれないが、全く架空のことではない、あり得た可能世界(possible world; Bruner, 1986)を描くことは心理学でも可能ではないだろうか。ある人が自分が直面している選択について、可能な全ての選択肢が見えている場合は少ないかもしれない。複線径路等至性モデルは、ある一人の人には見えないかもしれない選択肢を可視化する力がある。その上で、研究者側も当事者側も色々なことを見通していける可能性がある。

ある人の人生を事例として表す場合、数直線的に表すことが多い。何歳で結婚、何歳で何と

かで、危機があってという話になりがちである。ライフコース研究のように複数人を扱う場合でも、結婚、第一子誕生などということを平均値にして、数直線的に表現する。確かに何かは分かっていた感じにはなるが平坦な感じになる。流産の経験をする人—あるいは出産直後に子どもが死んでしまう場合だってあるのだが—そういうことは全く見えない。たとえば、戦前の女性と戦後の女性の比較をこのような形で行うと、女性が子どもを持つ年齢の比較は容易だが、子どもを持たなかった人（本人が望んだか望まなかったかは別として）が存在することを無視しがちとなる。モデルだから単純なのがいいかもしれないが、基準的人生の押しつけのようなことが起きていないとは限らない。

人生のあり方を複線径路等至性モデルのようなダイアグラム（のような形）で表すと、ある径路をとらなかった時のことも展望することが可能になる。実際にデータがあるかどうかとは関係なく、選択肢を示すことは可能なのである。筆者は個人的に、見えないものが見えるような概念を作ることが質的研究の醍醐味だと思っている。学生や院生に対しては「見えたことの意味を理解するのも大事だけれども、見えないことが分かる概念作りをする方がもっといい」とよく言っている。

また、セラピーの事例報告などでは、事例が他の道を選び得たのに選ばなかった故の問題ではないか、あるいは、選択肢が見えなかった故に問題に直面してしまったのではないかと感じる場面もあるだろう。そうした洞察についても、経験的理論的な裏づけがあればモデルに描き込んでいけるから、複線径路等至性モデルは事例報告・事例研究にも転用可能ではないかと考える。このような工夫は、本稿で述べた「サンプリングの小ささ故に指摘される偏りの可能性」を補いえるのではないだろうか。歴史に「IF（もし）」は禁物と言うが、個人史におけるある種

の失敗は、その原因を理解することで他者へのモデルとなりうるはずである。

7 複線径路等至性モデルの成り立ち

複線径路等至性モデルにおいて最も重要な概念は複線径路と等至性であり、それぞれ trajectory と equifinality の訳である。等至性は、もともとドイツの生物学者ドリーシュ（Driesch）が、ウニの胚の研究において提唱したものである。ウニの完全な卵でも、卵を分割した場合でも、あるいは、二つの卵を一つにつけた場合でも、それぞれ同じ結果、即ちウニの正常な個体が一つできるという現象を見いだしてそれを結果が等しくなるという意味で等至性と呼んだのである（溝口・松永、2005参照）。その後、フォン・ベルタランフィは一般システム理論を構築し、人間は環境から独立した個体としてではなく開放系（開放システム）としてみなされるべきだと主張した。そして開放系の特徴として等至性をあげたのである。複線径路は、発達の多様性や多線性を示すためにヴァルシナー（Valsiner, 2000）が導入した概念である。なお、この複線径路は、前述のように等至点が想定されることで定まることに注意を要する。到達する点が定まることで多様性が見えてくるのである。例えば、人間の一生であれば「生と死」が等至点であるが、心理学の研究が「生と死」を等至点として設定しても面白味はないだろう。例えば、「入院」とか「退院」であれば、そこに至る多様性を描くことに意味があるのではないか。なお、複線径路等至性モデルはその後大きな変貌をとげ、いくつもの重要な概念を生み出している。これについては前述の通りだが、特に重要なのは「両極化した等至点」という概念である。これは安田（2005）の研究を遂行中に生成された概念であるが、これによって1つの等至点に至る多様性を描くという初期シ

STEM論的な制約を脱し、複数等至性 (multi-finality) を描くことが可能になった。このことはさらに可能世界 (possible worlds; Bruner, 1986) を描くツールとしての複線経路等至性モデルの可能性を切りひらいたものでもある。

また、ワディントンによるエピソードティック・ランドスケープモデル (Waddington, 1956) との異同を問われることがあるが、これは砂山を転がる球の絵で表されていることからわかるとおり、等至点が設定されておらず、「末広がり」的発想であると言える。また、球がオープンシステムとして捉えられていないという違いもある。ワディントンが砂山で表すのと異なり、筆者自身はTEMを滝のモチーフで表すと良いのではないかと考えている (図2)。

なお複線経路等至性モデルはある意味で楽観的な人間観に基づいていると感じる人がいるかもしれない。ヴァルシナーや筆者はそういう感じの人間なのである。我々は分岐点という概念を好み、転機という概念を好まない。転機には不可逆的な変化という意味合いが強いからである。

例えば、筆者自身、大学で心理学を専攻していなかったらどうなっていたらだろうか、と考えることがあるが、おそらく近くの大学の経済学部に行っていたはずである。実際、高校二年の

時までは漠然と経済学部進学を考えていたのである。ここで、高卒後に就職ということは考えていなかった。こうした選択には社会的方向づけの力が大きく働いていたと言えるし、大学なら経済学部という短絡的考え方には選択肢が見えていなかったということが可能である (サトウ, 2006aも参照)。では、経済学部に入学したからといって卒業後に銀行にでも勤めてそこでうまくやっていけたかと考えると、必ずしもそうとは思えないのである。おそらく、経済学部で経済心理学という学問のことを知り、適性検査で人間を理解することは不可能だ、というようなことを言っていたのではないかと思う。適性検査への疑問は心理検査への疑問へとつながり本を出すことになったかもしれない。私は知能検査について、『IQを問う』(サトウ, 2006b) という本を出しているが、たとえ心理学専攻に入学しなかったとしても、これとほぼ同じような本を出していたかもしれないのである。これはもちろん勝手な憶測にすぎないが、こうした柔軟な人生のプロセスを想定してもいいと思うのである。

TEMというモデルを用いて研究をするための簡単な手続の紹介が表1に示されている。この方法論はまだまだ生まれたばかりである。限界も多いと思うが、多くの人がこの方法論を鍛え上げてほしい。

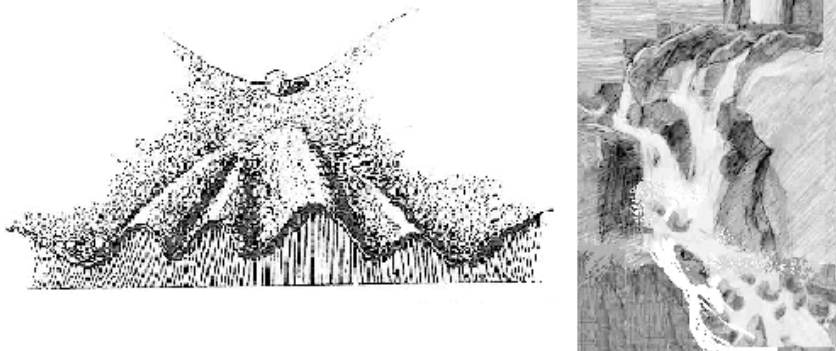


図2 発達についての砂山と滝のモチーフ (左=Waddington, 1956より)

表1 TEM実践のための簡単な手順化（サトウ他，2006を改変）

1	関心のある事象や経験を等至点としてサンプリングする。（ただし等至点は研究中に変えてもよい）
2	データを収集する（面接や観察その他の方法）。
3	面接で得られた語りを最小単位に分け、それを分析単位とする。
4	分岐点や必須通過点を設定する。その際は語りで得られた情報だけでなく、社会的、制度的、文化的知識を活用する。
5	両極化された等至点を設定する。自分が関心をもつ事象の補集合的な事象を書き込み、両極化した2つの等至点に至る道筋を描けるような準備をする。
6	TEMとして複線径路を考慮しながらダイヤグラム化する。その際、実際のデータによらない場合には点線で描くなどの工夫が必要である。
7	分岐点や必須通過点において選択を強要するような背景要因があればそれを「社会的方向づけ」として描く。
8	類型化やKJ法を行う場合はその結果も参照して考察を行う。

*表1の注 類型化やKJ法（の図解化）との併用も可能である。むしろ併用による複眼的理解がより望ましいように思える。

8 まとめに代えて：水平的人間関係の構築へ向けて

筆者は2003年以来、日本学術振興会人文社会科学振興プロジェクトにおいて「ボトムアップ人間関係論の構築」というテーマの研究プロジェクトを行っている。専門職とそれ以外の人たちの関係、つまり、先生と生徒、医師と患者、法曹と一般市民との関係などを考えるプロジェクトである（佐藤，2004；サトウ，2006c）。その含意は「水平的人間関係の構築」である。プロ（専門家）にたいするレスペクト（尊敬）は必要だが、それが上下関係になる必要はない。また、水平的人間関係構築のためには選択肢が必要である。ある状況において頼れる専門家が一人しかいないということでは、そこにどうしても従属的な関係が絡みがちである。複線径路等至性モデルは、単に個人の発達モデルとしてのみ有効なのではなく、様々なレベルにおける選択肢や複線径路が重要であるという理論的根拠となる。複線径路等至性モデルはシステムを対象にする様々なレベルの研究に適用可能である。表2に示したように、日常生活における意

思決定、個々人の発達過程だけではなく、歴史にも適用できる。今あげた個人と専門家の関係についても、現在の関係のあり方を等至点として設定するなら、選択肢がどのように存在したのか（しなかったのか）、ということを描くことが可能となるのである。たとえば、専門家と非専門家の関係においては、基本的に技術が受け渡しされればよいというようになっているとも言えるが、先生と生徒の間で知識が受け渡される場合、そもそも基本的に人間関係が存在する。そこで人間関係こそ検討すべきであるという考えも成立しうる。関係成立に至る様々な径路や様々な力を描いていく必要もある。

2005年秋、心理に関する資格が国家資格になるかどうかニュースとなった（その後、見おられた）。その際、心理「し」の「し」をどう表現するのかについても問題になった。すでに看護の資格では看護「ふ」が看護「し」に変更されたがその際に「し」は師となった。「士」は侍を意味し、侍は男を意味するのでふさわしくないのだという。ジェンダー論という立場からは分からないことでもない。だが、だからといって「師」にすればいいのだろうか。師は言

表2 TEMで記述できる3つのレベル（サトウ他，2006）

マイクロ・ジェネティック	日常生活における意思決定
メゾ・ジェネティック	個々人のライフコースの発達過程（個体発生）
マクロ・ジェネティック	社会や社会集団、組織の歴史

うまでもなく師匠の師。センセイである。「なぜ皆がセンセイ様になろうとするのか」という疑問を持たざるを得ない。

もちろん、「士ではなく師にしたい」ということにも歴史的経緯があるから、単純な批判は差し控える。だが、こうしたことも複線径路等至性モデルで表現していけるように思える。筆者としては、師を使う等至点の他に、他の等至点を設定したい。そんなに「し」を名乗りたいのであれば「使」はどうだろうか。お使いである。使がつかわれている単語としては、大使や天使がある。天使というのは天のお使い。遣唐「し」も使だった。心理使にすると最初はちょっと違和感があるだろうが、そのうち慣れる。給仕の「仕」でも良いかもしれない。看護婦だって看護師になって違和感があつたものの、今ではほとんど問題にされない。これが看護使、看護仕になってもよいのではないだろうか。もちろん、教師は教使・教仕、弁護士は弁護使・弁護仕になってほしい。名称から水平の人間関係を構築していくのも大きな社会提言になりうるだろう。資格や技術は一体誰のためのものなのか、それを考えれば「使」や「仕」の方がふさわしくないだろうか。

心理に関する国家資格ができるなら名称から考えていくことも重要になるのではないだろうか。そして「師」ではなく「使」や「仕」の選択肢を設定するなら、今とは異なる径路を開いていくことができるように思える。それは専門サービス提供者と受給者の水平的関係を構築することにつながるはずだからである。

【注】

本稿は2005年第15回ブリーフセラピー学会（大会テーマ 場の持つ力を生かし伝えるために）のシンポジウムにおける発表のうち主として後半部分の記録を元としている。大会委員長・遠山宜哉（岩手県立大学）先生、織田信男（岩手大学）先生をはじめとする皆様

に感謝いたします。前半部分についてはブリーフセラピー学会の学会誌『ブリーフサイコセラピー研究』に掲載される予定である。

本稿の執筆にあたっては日本学術振興会・人文社会科学振興プロジェクト「ボトムアップ人間関係論の構築」及び2006～2008年度科学研究費補助金（萌芽研究）「発達の多様性を描くための複線径路・等至性モデルの展開」（課題番号18653069；代表者・佐藤達哉）の援助をうけた。

文献

- Bergson, H. (1889) *Essai sur les données immédiates de la conscience*. Paris : F. Alcan (中村文郎訳 (2001) 時間と自由 岩波書店).
- Bruner, J.S. (1986) *Actual Minds, Possible Worlds*. Cambridge, MA: Harvard University Press. (田中一彦訳 (1998) 可能世界の心理 みすず書房)
- Frank, A.W. (1995) *The Wounded Storyteller: Body, Illness and Ethics*. Chicago: University of Chicago Press. (鈴木智之 訳 (2002) 傷ついた物語の語り手—身体・病い・倫理 ゆみる出版)
- 金森修 (2003) ベルグソン—人は過去の奴隷なのだろうか—. 日本放送出版協会
- 河合隼雄 (1976) 事例研究の意義と問題点. 臨床心理事例研究, 3, 9-12. (1986 心理療法論考 新曜社に再録)
- 木戸彩恵 (2006) 異なる文化的状況に属する青年期日本人女子学生の化粧行動—日本とアメリカでのインタビュー調査の質的分析—. 立命館大学文学研究科修士論文 (未公開)
- Kojima, H. (1998) The construction of childrearing theories in early modern Japan. In Lyra M. & Valsiner J. (Eds.), *Child development within culturally structured environments*. Vol.4. Construction of psychological processes in interpersonal communication. 13-14. Stanford, Ct.: Ablex Publishing Corporation.
- 正高信男 (1999) 育児と日本人. 岩波書店
- Moghaddam, F. M. (2005) *Great ideas in psychology: A cultural and historical introduction*. Oxford: Oneworld Publications.
- 佐藤達哉 (2004) ボトムアップ人間関係論の構築. 21世紀フォーラム, 94, 24-32.
- サトウタツヤ (2006a) 心理学 あたらしい教科書「学

- び」]. プチグラパブリッシング, 46-51.
- サトウタツヤ (2006b) IQを問う. プレーン出版
- サトウタツヤ (2006c) ボトムアップ型人間関係をつくる. ミツカン「水の文化センター」の水の文化「人」ネットワーク. http://www.mizugr.jp/people/ppl_20a.html 2006年7月26日アクセス確認
- サトウタツヤ (印刷中) 文化心理学からみた現場を伝えるいくつかの工夫. プリーフサイコセラピー研究
- サトウタツヤ・安田裕子・木戸彩恵・高田沙織・ヤーン=ヴァルシナー (2006) 複線径路・等至性モデル 人生径路の多様性を描く質的心理学の新しい方法論を目指して. 質的心理学研究, 5, 255-275.
- 富田恭彦 (1994) クワインと現代アメリカ哲学. 世界思想社
- 溝口元・松永俊男 (2005) 生物学の歴史-改訂新版. 放送大学教育振興会
- やまだようこ (編) (1997) 現場心理学の発想 新曜社
- やまだようこ (2002) 現場心理学における質的データからのモデル構成プロセス——「この世とあの世」イメージ画の図像モデルを基に. 質的心理学研究, 1, 107-128.
- Valsiner, J. (2000) Culture and human development. London: Sage
- Valsiner, J. (2001) Comparative study of human cultural development. Madrid: Fundacion Infancia y Aprendizaje.
- Valsiner, J. and Sato, T. (2006) Historically Structured Sampling (HSS): How can psychology's methodology become tuned into the reality of the historical nature of cultural psychology? In Straub, Kölbl, Weidemann and Zielke (Eds.) "Pursuit of Meaning. Advances in Cultural and Cross-Cultural Psychology", Transcript Verlag, 215-252.
- 安田裕子 (2005) 不妊という経験を通じた自己の問い直し過程: 治療では子どもが授からなかった当事者の選択岐路から. 質的心理学研究, 4, 201-226. (2006. 7. 21 受稿) (2006. 9. 4 受理)